

ブエノス・アイレス大学経済学部

Facultad de Ciencias Económicas de la Universidad de Buenos Aires

序 論

ここで、わたくしはブエノス・アイレス大学なり、あるいはその経済学部なりを純粋に研究機関としての角度のみで記述していない。むしろ、現在の大学がかかえている諸問題をありのままに描写し、ラテン・アメリカの喫緊の基本問題の一つたる教育制度を考える上での一資料にしたいと思った。

1. アルゼンチンの諸大学

ラテン・アメリカでは一般にそうであるが、アルゼンチンの大学制度においても官学が占める地位は異常に高い。これは初等教育から大学教育にいたるすべての教育制度の立ち遅れの一部として、私学がまだほんの揺籃期にある以上やむをえないことである。私大が公認されるようになったのは1959年からであるが、数からいえば1965年9月現在、全国で11の大学が国の文教当局によって正式の大学として登録されており、ほかにも政府の認可を申請している群小「大学」が10校近く存在している。これらの大多数はカトリック系のものであり、中でもブエノス・アイレスにあるアルゼンチン・カトリック大学 (Universidad Católica Argentina) やサルヴァドル大学 (Universidad del Salvador) などの名声は高まりつつあるが、なんといっても活動分野は主として人文科学面に限られやすく、国立大学のような広範な業績は期待できない。

一方、国立大学は全国に9校あり、そのほとんどが完全な総合大学の体裁を保っている。それらの名称と所在地はつぎのとおりである。

- ブエノス・アイレス大学 (Univ. de Buenos Aires, ブエノス・アイレス連邦首都)
- ラ・プラタ大学 (Univ. de la Plata, ブエノス・アイレス州ラプラタ市)
- コルドバ大学 (Univ. de Córdoba, コルドバ州コルドバ大学)
- ラ・プラタ河沿岸大学 (Univ. del Litoral, サンタ・フェ州サンタ・フェ市およびロサリオ市)

- 東北大学 (Univ. del Nordeste, コリエンテス州コリエンテス市およびチャコ州レシステンシア市)
- 南部大学 (Univ. del Sur, ブエノス・アイレス州パイア・ブランカ市)
- トゥクマン大学 (Univ. de Tucumán, トゥクマン州サン・ミゲル・デ・トゥクマン市およびサルタ州サルタ市)
- クエヨ地方大学 (Univ. de Cuyo, メンドサ州メンドサ市, サン・ファン州サン・ファン市, およびサン・ルイス州サン・ルイス市)
- 工業技術大学 (Univ. Tecnológica, ブエノス・アイレス市, アベリャネーダ市(ブ州), パイア・ブランカ市, コルドバ市, ラ・プラタ市, メンドーサ市, レシステンシア市, ロサリオ市, サンタ・フェ市, サン・ミゲル・デ・トゥクマン市)

現在、アルゼンチン社会の指導的地位にある者は、いずれもこれらの国立大学出身者であるが、中でも目立つのはブエノス・アイレス大学の卒業者に対して与えられてきている形式上、事実上の特権的地位である。

以上の説明を裏付けるような概数を掲げるとつぎのとおりである。1965年現在における大学学齢期(19~24歳)人口は214万9000人、大学在籍者は21万1000人(就学率10%)、このうち国立大学在籍者は16万6000人、中でもブエノス・アイレス大学だけで約8万人の学生を擁している。

2. ブエノス・アイレス大学

ブエノス・アイレス大学の諸学部はそのいずれの分野においてもアルゼンチンのみならず、ラテン・アメリカ諸国の大学に比し、最も優れた業績を挙げているといわれている。歴史的にはペルーのサン・マルコス大学(1551年創立)や、前記のコルドバ大学(1613年創立)ほどの古さはないが、それでも1821年創立というから、すでに140年余りを経過している。なお経済学部自体は1913年の設立になり、ごく最近、その50周年記念行事が行なわれたばかりである。

総合大学としてのブエノス・アイレス大学はつぎの諸学部からなる。



経済学部正面

- Agronomía y Veterinaria (農・獣医学)
- Arquitectura y Urbanismo (建築・都市計画学)
- Ciencias Económicas (経済学)
- Ciencias Exactas y Naturales (数・理学)
- Ciencias Médicas (医学)
- Derecho y Ciencias Sociales (法・社会学)
- Farmacia y Bioquímica (薬・生化学)
- Filosofía y Letras (哲・文学)
- Ingeniería (工学)
- Odontología (歯学)

これらの10学部は喧騒なブエノス・アイレス市内のあちこちに分散しており、わが国の場合に一般的な大学のキャンパスは、ここにはない。しかし、メキシコ、サン・パウロ、カラカス、ボゴタ等をはじめとして各国に流行している大学都市 (Ciudad Universitaria) の建設がここでも行なわれ、ブエノス・アイレス市内北部のラ・プラタ河畔にその敷地がある。しかしこの10年になんなんとする大計画もまだそのほんの一部ができあがったのみで、全学部を集めるまでに完成するのは、いつのことになるか、まったく予測することができない。これはむしろ、国家財政が大きな危機に瀕しているからにほかならない。

しかし、このように遠大な計画はさておき、この大学が現にかかえ込んでいる問題は多様で、しかもきわめて深刻である。しかも経済学部はその問題のすべてを集約したような府である。大学の構造改革については大学の中からも William L. Chapman による主張 (代表的総合誌 *Analisis*, 1965年8月30日号) がなされているが、かれが経済学部出身 (前学部長) であることはけっして偶然ではない。

I 経済学部のかかえている諸問題

1. 環 境

経済学部は市のメインストリートの一つであるコルドバ通りに面し、医学部と向き合っている。この建物はコルドバ通りおよび他の3本の街路で囲まれた一区画を占領する大きなものであるが、それゆえに外部の喧騒はそのまま教室にも伝わってくる。中央の狭い中庭でも、巨大な学生の波にのまれてゆったりすることはできない。教室の机、椅子、黒板、照明は劣悪をきわめるし、廊下やホールに氾濫するビラと掲示、建物の外壁にところも美観もかまわずペンキでぬりたくられたプロパガンダなどが学問の雰囲気破壊している。ある雑誌によれば、経済学部は「2万3000人の学生が、むさくるしい部屋、いくつか板仕切りされた大教室、窓のない独房のような室につめ込まれ、これ以上空気を悪くしないためにチヨークを使うことも、やめねばならない状態で学んでいる。隣接した Morgue (死体置場) からの臭気で、暑い日には講義を中止して室を出なくてはならない」(*Primera Plana*, 1964年11月24日号)。こういう環境での勉学が、いかに味気なく、あるいはつらくさえあるかをわたくしは初めて体験した。こうした状態を招いている原因の一つは、国家財政の破綻にあるが、他方、学問とか公共物というものに対するアルゼンチン学生精神状況をも如実に示すものとして興味深い。

2. 教授たち

学部の中には教授用待合室はあっても、いわゆる「研究室」に類する室は全然ない。教授たちはその研究を自宅か勤務先で行なうことになる。「勤務先」と言ったが、これはこの学部の教授連がほとんど全員学部での講義にフルタイム・サービスをしていない、ということにほかならない。教授たちは中央銀行とか官庁、政府機関あるいは民間会社の要職にあり、もしくは自分で公認会計士として、あるいはエコノミストとして個人の事務所を開設しているのである。わたくしが接触をもった方々の中でも、たとえば副学部長 Garcia Pazos 博士は国立工業銀行理事であり、ゼミの指導教授 Ferrer 博士はセンターにエコノミストの Estudio をもっている。これはむしろ内職とは考えられていない。教授たることと他の職につくこととは対等の立場にある。これは一つには授業時間との関係で、それが許されるからでもあるが、主たる原因は俸給が低劣だからである。しかしこうしたパートタイム教授のあり方が学問発展の上で偉大なマイナスを

招くであろうことは容易に想像できよう。

3. 学生の数と質

一方、学生たちもその大多数がパート・タイム学生である。この点は医科、工科等では大分事情が異なるが、経済学部を初めとする文科系諸学部では、まず例外なしと言ってよいのである。教授も学生も、昼間他に専門とする勤務がある以上、授業はいきおい早朝（8～10時）および夜間（19～21時、日本のような夜学という観念はない）にのみ行なわれ、昼間の学部は開店休業となる。これは無償、無試験入学制度と相まって最高教育への機会均等の考え方に由来する措置である。したがってそれなりに大学教育の普及というメリットはもっているが、反面、多くの問題を生じていることは否めない。わたくしは端的に言ってデメリットのほうが大きいと考える。

第1に学生の数の膨大化と、質の低下という事実である。この学部を今や「南アメリカで最も人口稠密で、かつ質的に最も薄められた学部となった」（前掲 *Primera Plana*）と表現するのあながち誇張ではない。2月の入学受付時には、無償、無試験、職業に就いても差し支えなし、とあって大量の女の子（まさに女の子といういでたちで）を含めた青年たちが、流行映画を見に行くがごとく受付窓口に行列を作る。こうした事態が招く結果は中途脱落、老学生の滞留という事態である。もともと初めから能力のない者が、いかに均等の機会を与えられたからといって、卒業することは不可能である。そのうえ勤務の関係で出席率は50%以下といわれ、学業も自然おろそかになって脱落していくのは当然の帰結である。経済では、今のところ、毎年の入学者の6%程度しか卒業生がなく、またほかに有効なフィルタリングの措置は講ぜられていないから、年々在籍者数はふえる一方で、現在なんと2万3000名がこの学部の在籍者とされているのである。経済学部の各コースは順調にいった場合5～6年で卒業することになっているが、10年以上在籍してしまいに卒業しない学生はざらにいる。わたくしの出席していたゼミナールは6年生のゼミであったが、中年以上の頭髪の薄くなった紳士が多数参集し、それなりに独特の雰囲気をかもし出していた。このような長期在籍者を万年学生“crónico”と呼んでいるが、crónicoは全学で6500名からおり、記録保持者としては医学部に38年、農学部30年、歯科に29年というような記録が残されている。しかし、これを例外的な喜劇として笑えないところが問題である。

第2に、このような巨大な学生群の存在は学園の維持

管理事務に大きな困難をもたらしている。たびたび述べた驚くべき赤字財政のため、大学予算は大きくシワ寄せをくい、ただでさえ日常のサービスも円滑を欠くというのに、こうした無制限な学生の受入れの結果、事態は悪化の一途をたどっている。

第3に、学問の質の低下ということが指摘されねばならない。教授側も学生側、主たる関心は実務のための技術をマスターすることにある。学問にうち込みうる最後の、そして最高のチャンスの生かし方としては、なんとももったいない話である。教授と人間的に接触し（これは物理的に不可能に近い）、豊かな人格の形成につとめるというような発想法は用いられていない。なんとかして早く「技術」をマスターし、公認会計士として、あるいはエコノミストとして独立し、今の下積みの勤めから解放されて、より良い収入にありつこうという考え方が主流になっている。先生方のほうでも「技術」の切売りに随しやすい。したがって学問の深化・発展に資するところは少ないだろう。たまたま租税制度に関する Jarach 教授の教室で学生と議論した際、わたくしがこの国の租税制度の総体系のバランスとか、一つの税が財政上あるいは経済全体の上で有する効果とか、大づかみな問題について質問してみたところ、十分な答えを提供しうる学生は見当たらなかったのびっくりした覚えがある。かれらの関心事は各税について様式第何号を用いて何月何日まで申告・納税すべしとか、税額計算の順序手続きといったような各税法の詳細な内容を、きわめて技術的に覚えることに集中されているからである。また、長期的な分析ということもアルゼンチンではやらない。たいていの経済分析が短期的現状分析をもっぱらとしているのも特徴的である。

4. 学生運動

経済学部を含めて、ブエノス・アイレス大学の各学部学生自治会 (Centro de Estudiantes) 内部にはキリスト教民主派たる Humanista と左翼改革派たる Reformista の対立がある。前者は大学の教育それ自体と学生生活の拡充をその活動の主眼としているが、後者はペロニスタや各種のコミュニスト、カストロ主義者など広範に左翼を包含する組織であり、もっぱら政治闘争にそのエネルギーを注いでいる。この両者の対立は全学的なものであり、大学の最高評議会 (Consejo Superior = 学長、歯科を除く9学部長ならびに教授、卒業生、学生の代表各5名ずつ、合計25名で構成) も両派に分かれている。Reformista は一時退潮しかけたが、現在では10名まで勢力を

ふやしてきている。なお、現在の学長 Hilario Fernández Long も経済学部長 Honorio Santiago Passalacqua も Humanista である。現在のところ少なくとも経済学部では学部評議会 (Consejo Directivo=学部長, 教授, 卒業生, 学生代表らで構成) も学部学生自治会も Humanista の勢力がかなり上回っていることはたしかだが, 表面的には Reforma の活動のほうが目だつのはまた当然であろう。

他のラテン・アメリカ諸国と同様に, アルゼンチンでも共産主義, カストロ主義の浸透は大きな問題となっている。ブエノス・アイレス大学はこの浸透の一つのポイントになるのではないかと, 世間の注目を集めている。たしかに文学部, 医学部, 理学部, 法学部などでは共産主義分子の活動は顕著になってきており, これらの学部の学生運動家の暗殺事件やデモの際の死傷事故などが暗い陰を投げている。経済学部では他学部に比して共産主義の浸透が特にさわがれている様子はないが, それでも1965年2月24日夜には米國務省顧問のロストウ (Walt Rostow) 博士追い出し事件が起こっている。すなわち同夜, 経済学部講堂で講演を行なうためロストウが来場したところ, 一群の学生 (何学部の者であるかは明らかでない) が, 口々に“キューバ・中国・自由ベトナム万歳” “Argentina, sí, Yanquis, no” を叫んでトマトや卵を博士めがけて投げつけ, ためにロストウは講演を断念して退散したのである。その後, この事件は当時の Oliveira 学長の辞任騒ぎにまで発展したのであった。

大学全体あるいは経済学部に残存する問題はまだいろいろとあるが, 一応以上のルポから問題の状況をくみ取っていただきたい。

II 経済学部案内

つぎに, こうした一連の諸問題とは離れて, 経済学部において学ぶ場合に必要な技術的なことがらのメモを作って, ご参考に供したい。

1. 入学とコース

ここ2~3年の間に, いろいろと制度の変更が行なわれ, いま検討中のプランも多い。現在の時点では, 学部のコース (carreras) はつぎの7コースである。名称とその内容を示す。

(1) 公認会計士コース (Contador Público)

このコースの卒業生は直接 (国家試験などなしに) 公認会計士の肩書をもつ。多くの場合公認会計士事務所をもち, 会社の監査役となる。

(2) 経営学士コース (Licenciado en Administración de Empresas)

このコースの卒業生には最も広く民間会社経営にタッチする道が開かれ, また経営相談ないし指導者として独立する道もある。

(3) 経済学士コース (Licenciado en Economía Política)

このコースでは経済理論, 経済史, 社会学等をインテンシブに消化し, 広く教養ある経済人, あるいは経済学者を養成する。卒業生は教師, 教授となり, あるいは民間会社, 国や州の政府機関, 国際機関に奉職し, あるいは独立のエコノミストとなる。

(4) 保険数理士コース (Actuario)

卒業生は保険, 社会保障, 金融事業などにおける複雑で精密さを要求される数理計算と統計をもっぱらとする数理士あるいは保険技師になる。

(5) 公認翻訳士コース (Traductor Público)

このコースの卒業生は公認翻訳士として登録され, 対外関係文書 (経済関係に限らない) の翻訳にあたり, その翻訳のみが正当かつ権威あるものとして受領される。

(6) 統計学士コース (Licenciado en Estadística)

現在検討中であるが, 本年中にも新設の運びになるであろう。この国で最も不足, 不備をなげかれている統計専門家を養成することにより, 会社, 政府機関の需要を満たそうとするものである。

(7) 博士課程 (Doctorado)

経済学部卒業生にもブエノス・アイレス大学の博士号を取得させることが, 1962年4月14日の大学最高評議会でも決議された。博士課程は会計学, 経営学, 経済学の3部に分かれている。この課程にはいろいろのものは公認会計士, 経営学士, 経済学士, 保険数理士および学部評議会と大学最高評議会にて許可した者に限られる。この課程に入学するためには厳格に満たさるべき多くの要件があり, 入学後は最低1年間に20単位を取得し, その後博士論文を提出することとなっている。

経済学部の中には, 別に, 経営, 経済, 数学, 法律, 人文の五つの分科 (departamentos) が存在しているが, これは日本の大学における「学科」の区別とは異なり, 学部当局側のアドミニストレーションの便宜で定められたものである。したがって, 経済学部では入学に際してはどの「分科」へはいるかを選択するのではなく, どの「コース」にはいるかを選択決定しなくてはならない。この選択は, ほとんど直接に将来の職業につながっているか

ら、きわめて重大な意味を有する。先に、この学部教育は職業教育的でアカデミックな匂いに乏しいと書いたが、いみじくも当局で出している入学案内に、コースの選択はすなわち将来の職業の選択と同じである旨注意書きがしてあるのを発見した。

なお、入学試験については、厳密に言うとは、卒業した中等学校の種類のいかんによっては簡単な資格検定試験がある。これはアルゼンチンの中学校は普通中学以外に商業、師範、工業など13種類に分かれているため、レベルの統一（経済学部では商業中学卒業生を基準とする。かれらだけはまったく資格検定を要しない）を図る必要があるからである。しかしいづれにしてもわが国のような選抜試験制度とは異なり、実質的には無試験と言ってよい。

2. 学期・講義・試験

学期 (cuatrimestre) は2学期制で、第1学期は3月～6月、第2学期は8月～11月まで、それぞれ4カ月間づく。

講義時間は8～10時、19～21時が標準で若干の例外がある。講義は一般講義、特別無試験制講義、ゼミナールに分かれる。

講義はほとんどが競争講座の形をとっている。

ちなみに諸種のコースの中から経済学士コースを選ん、その履修すべき科目を掲げておく（教授名は省略）。

(1) 必修 (97単位)

- (イ) 会計原論、(ロ) 経済学原理 I, II、(ハ) 生産と消費理論、(ニ) 通貨・信用・銀行論、(ホ) 経済変動論、(ヘ) 国際経済学、(ト) 経済成長論、(チ) 経済思想史、(リ) 比較経済制度論、(ル) アルゼンチン経済問題 I, II (=ゼミナール)、(レ) 経済成長政策 (=ゼミナール)、(ロ) 経済地理、(カ) 財政学、(キ) 労働・社会政策、(ク) 通貨・財政政策、(ケ) 数理分析論 I, II、(コ) 経済数学、(サ) 統計学、(シ) 公法概論、(ス) 私法概論、(セ) 経済社会史(一般)、(ソ) 経済社会史(アルゼンチンおよび米州)、(タ) 科学の論理と方法、(チ) 社会学、(リ) 政治学、(ニ) 哲学概論

(2) 選択 (8単位)

(詳細は省略する)

試験は2月と7月に行なわれ、他に5月と10月に追試験がある。試験の形式は一般的には口答試験であるが、若干のペーパーテストが併用されることもある。

3. 学部の施設

学部の建物、施設の一般的な様子についてはIに述べた。

図書室はこの建物の2階にあり、蔵書は8万点に近い。しかし、閲覧設備は不十分で、1日の利用者延べ3515人に対し、座席数923(回転延べ数)と極端な差がある。机、椅子、照明等は悪化している。

学寮、運動場、医療施設その他の学生厚生施設はないに等しいが、これらの点ではわが国とは考え方がまるで異なるのだからやむをえない。しかし「大学」当局側は文芸部や運動部を設置して、学生の便宜を図るよう努力しているようである。

4. 定期刊行物

経済学部では、経済学部学生会(Colegio de Graduados en Ciencias Económicas) および前記の経済学部学生自治会(Centro de Estudiantes de Ciencias Económicas) と3者共同で、『経済学雑誌』(Revista de Ciencias Económicas) を発刊している。本誌は1913年の創刊になり、当初は学生自治会の機関誌となっていた。その後これに学生会および、学部が加わって3者共同の機関誌とされ(1921年)、さらにこの3団体は離合をくりかえした後、1958年以後その形で今日まで波乱なく続刊されてきている。1963年には学部同様この雑誌も50周年を祝って特集を行なった。最近ではだいたい年に2回刊行されるならわしであり、通算では500号を越えている。この雑誌の入手については学生会(Córdoba 1261, Buenos Aires)に問い合わせるとよい。

5. 卒業生研修講座

毎年7月下旬から9月下旬にかけて、約2カ月にわたり、隔日、夜間に、学部内で卒業生に対する集中コースが開設される。これは Departamento de Graduados という名で呼ばれるが、通常の大学の過程とは無関係だし大学院と呼べるものでもない。社会人に対する教養講座とでも言えようか。このコースは1958年に開設され、1965年で第8回目を数えた。1964年のテーマは企業経営指導、1965年のテーマは経済発展の問題となっている。このコースには経済学部卒業生でなくとも、要するに内容の理解に支障をきたさないものなら、だれでも入学できる。外国人でも差し支えない。ただし、すべて有償である。修了後には修了の証明書が与えられることになっている。

6. 外国人学生の実入れ

アルゼンチンが文化交流協定を締結している国(フランス、スペイン、イタリア、パラグアイ)の中学卒業生は、アルゼンチン人とまったく同じ条件で入学しうる。それ以外の国の学生は、アルゼンチンの歴史、地理、ス

ペイン語、アルゼンチンとラテン・アメリカの文学、道徳等の課目について資格検定試験にパスしなければならない。日本人の場合、日本の大学卒業資格も役に立たない。高校卒業資格までが意味をもつ。

しかし、特別の場合には、外国の大学での履修に、ブエノス・アイレス大学の課程の50%（最高限度）までの効果を認め、ブ大で残りの単位（50%以上）相当の科目に合格すれば、この大学の卒業生としての肩書を与えている。

さらに「特別学生」(alumno especial) の制度がある。これは、大学規程第21条の定めにより、その外国人の能力の証明（たとえば大学を卒業していること）がなされれば、特別学生として受け入れ、本人が希望する個別科目の聴講・受験を許可し、要請があればその個別科目の試験合格証明もさし上げましょうという制度である。だから、逆にいえば特別学生といってもこの学部の卒業生の肩書を得るためには、やはり通常の学生と同じ年限（最低5年はかかる）をかけなくてはならないのである。なおわたくしの場合、「特別学生」として受け入れられるためには、アジア経済研究所や在ア日本国大使館からの書簡、大学卒業証明書（証明者の正当なるを証する駐ア大使の証明、証明書の公認翻訳、その翻訳人の登録証明等）という具合に実に数々の書類を出すことを要求された経験がある。

だから、卒業とか個別科目の合格などということの問題としないで、1年でも2年でも短期的に留学し、講義を聴講するためには、こうした複雑で多大な時間を犠牲にする方法を避け、「聴講生」(oyente) の制度を利用するのが便利だろう。これは制度というよりは、元来大学の講義は社会に広く開放されるべきものという発想法から自然に制度化されたものと考えられる。正式に入学手続きをしないでだれでも好きなときに好きな講義に出席できるが、それをわが国のように「ニセ学生」と考える者はないのである。もっとも、聴講生には、受験は認められないし、永久に卒業のチャンスはやってこないのだが。

なお、ブエノス・アイレス大学の諸学部について、あるいは他の国立、私立大学の状況については下記に問い合わせればよい。ここではパンフレット *Guía del Estudiante* を発行している。

Universidad de Buenos Aires, Departamento de Orientación Vocacional, Florida 656, Buenos Aires
経済学部の様子については

Secretaría General Facultad de Ciencias Económicas, Córdoba 2122, Buenos Aires

に問い合わせればよい。また同番地で、Centro de Estudiantes de Ciencias Económicas に問い合わせてもよい。この自治会ではパンフレット *Guía del Estudiante* (前掲のものとは別) を刊行している。

(海外派遣員 篠沢恭助)

— 在ブエノス・アイレス —